

# 日本庭園学会 ニュース

The Academic Society of Japanese Garden News

No.56

平成19年度夏

予告  
特集

平成19年度関西大会

図書紹介

発行 日本庭園学会(会長 中島 宏)  
〒150-0041 東京都渋谷区神南 1-20-1  
(有)造園会館気付  
TEL(03)-3462-2850 FAX 03-3464-8465  
<http://www.soc.nacsis.ac.jp/asjg/>



## 考庭学は可能か、古代の庭を探求する 第1回 関西研究会・縄文・弥生期 開催



去る7月15日(日)、けいはんな記念公園(京都府精華町)において、第1回関西研究会が開催された。午前中には、「縄文・弥生時代における庭」と題し縄文時代と弥生時代の集落の遺跡を検討事例に、古代の庭の実態について活発な議論が行われた。

午後は公開シンポジウムとして、奈良文化財研究所の高瀬要一氏と京都造形芸術大学教授の仲隆裕氏を講師として招き、それぞれ「奈良時代の庭」・「平安時代の庭」と題して講演が行われた。

続いて京都産業大学教授の鈴木久男氏らが加わり、パネルディスカッション「奈良時代と平安時代における庭の研究の現在」が行われた。(今江秀史)

<第3面に関連記事>

### 【写真解説】

高瀬要一氏による奈良時代の庭園に関する講演 (左上)  
仲隆裕氏による平安時代の庭園に関する講演 (右上)  
公開シンポジウムのパネルディスカッション (左下)  
研究会「縄文・弥生時代における庭」 (右下)

# 予告 平成19年度関西大会・シンポジウム

平成19年12月8・9日 京都市山科区

関西大会実行委員会（委員長 鈴木久男）と研究会・シンポジウム実行委員会（委員長 小野健吉）は、平成19年度関西大会の開催スケジュール及びシンポジウムのテーマを決定した。

開催日程は、平成19年12月8日（土）と9日（日）の2日間である。8日は現地見学会及び総会、懇親会が

開催され、シンポジウムは9日に行われる。

会場は京都市山科区。現地見学会は、現在護岸の修理が行われている醍醐寺三宝院庭園と勸修寺庭園を予定している。シンポジウムでは、テーマに沿った文化財庭園の実務に携わる4名の話者提供者を招聘する予定。

大会の詳細については次号の本紙にて発表する。

## 研究発表会 発表者の募集

研究会・シンポジウム実行委員会では、来る12月9日（日）に行われる研究発表会の発表者を募集している。発表を希望する方は、A4判用紙に発表者の氏名、題名、概要（200字程度）、発表時に使用を希望する機器類、連絡先を明記のうえで、10月31日（水）までに関西大会実行委員会事務局へ送付し発表の登録をすること。研究発表の概要は次号の本紙（No.57）に掲載する予定。

続いて発表者は、11月7日（水）までに研究発表資料を大会実行委員会事務局へ送付されたい。研究発表資料の分量は、2ページ、4ページもしくは6ページで、1ページあたりの文字数は、図・表・写真等を含めて、2,000字。研究発表資料集は、提出原稿をそのまま版下



平成19年度全国大会の研究発表風景

として印刷することから、できる限りワードプロセッサを使用して作成して頂きたい。研究発表資料は、全発表者分をまとめて資料集とし発表会で配布する。

ページレイアウトは、学会誌の論文等に準じ、横書き2段組、1段あたり25字40行となっている。なお、書式はホームページからダウンロードが可能。発表時間は20分、質疑5分を予定し、スライド・パワーポイントの使用が可能となっている。

なお、申し込みと資料の締め切りは厳守のこと。

### ▼申込先

〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116

京都造形芸術大学日本庭園研究センター気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342

※申し込みは、葉書もしくはFAXにて。



平成19年度全国大会・懇親会の風景

# その風趣さえも伝える、庭園に相応しい表現とは

## 公開シンポジウム 文化財庭園の整備・維持管理の表現

本年度の関西大会の公開シンポジウムでは、近年、活発に進められている文化財庭園の整備・修理並びに維持管理に関する表現を主題に行われることになった。一言に「表現」といっても平面図や立面図・構造図・写真・工程表・報告書などその媒体はとても幅広い。

今回のテーマの端緒となったのは、平成17年度に開催された関西大会の公開シンポジウム「文化財庭園の発掘技術と修復・整備」である。

全国各地で行われている文化財庭園の整備・修理の推進に一役を買っているのは、埋蔵文化財の発掘調査である。先のシンポジウムにおいて討議されたように(『日本庭園学会誌 No.16号』掲載)、庭園の修理と発掘調査とを同調して進めていくには、埋蔵文化財の発掘調査の手法を庭園の修理関係者がよく理解した上で、さらに発掘調査から得られた情報を整備・修理へ円滑に反映させていく必要がある。また、鈴木久男氏の発言からも知られるように(前掲書 p.48)、文化財庭園では池の浚渫といった日常の維持管理で行われる行為でも、貴重な埋蔵文化財としての情報が失われる可能性がある。したがって、文化財庭園の修理関係者は、通常の庭園に関わる姿勢に加えて埋蔵文化財に関する専門知識や技術・技能を学習する必要に迫られているといえよう。

そこで問題になるのが他ならぬ表現なのである。発掘

近年の埋蔵文化財の発掘調査では、庭園(つくり庭)と認められる遺跡だけではなく、集落跡に庭であると想定されるような遺跡が検出されている。それら祭祀遺構環状列石、作業場などの遺跡は、遺跡を庭の範疇としてとらえようとする心も葉なされていない訳ではない。

しかし「城之越遺跡」や「飛鳥京苑地」など、庭園の原初になったと想定される遺跡の事例が増加したことによって、つくり庭以外の庭の存在をより具体的に検討する必要性が生じている。当研究会は、こういった観点か



平成19年度公開シンポジウムの開催風景

調査で得られるのは、当然のことながらそれぞれの庭園の過去の情報である。そこには、現在では失われてしまった思考や技術が含まれている可能性があり、今日の私たちの描写や記述では表現できない事象もあり得る。その場合、やはり庭園が置かれている状況を柔軟にとらえ、それぞれに相応しい表現を創出し、庭園に接する態度も柔軟に変えていく必要があるだろう。

以上の問題意識に基づき、今回のシンポジウムでは、文化財庭園の整備等とまさに今関わっている実務者から、最新の話題と技術を紹介して頂きつつ問題点をあぶり出し、それを題材に討議を行うものである。

## オニマスな庭・アノニマスな庭

### 第1回 関西研究会

ら改めて庭を探求しようとするものであり、便宜上その研究を「考庭学」と仮称している。今回は、情報提供として栗野隆氏・今江秀史氏・恵谷浩子氏・町田香氏から、それぞれ「三内丸山遺跡の「にわ」空間」・「考庭学に関する先行研究」・「環状列石における庭的空間」・「池上曽根遺跡に

みる「庭づくり」的要素の可能性」が発表された。討議では、考庭学を進めていく上で重要となり得るキーワード「オニマスな庭・アノニマスな庭」が栗野氏から提示された。その詳細は次号の本紙にて紹介する。



## 公開シンポジウムによせて

「全国大会」平成19年6月17日(日)

「庭園の歴史をめぐって」、そして「庭園の現代をめぐって」。尼崎、進士、両氏の講話は庭園というテーマはもとよりさらにそれを鳥瞰しながら、庭園の本質を貫いて私たちの観念を解きほぐしてくれるようだった。今この分野に求められるものとはいったい何なのか、両氏の講演内容に沿って私なりに考えたことを記したい。

### ■歴史から学ぶ

尼崎氏の講演中に「庭は自然の輪廻の中に人の創造的営みが融合することで生み出されてきた」とあったように、庭の姿は人々の自然本位の暮らしに裏づけられてきたと言えるだろう。こうして今日のように人の暮らしが自然からかけ離れていくと、庭の本質がまるで霧につつまれて見えなくなっていくようである。かつて、人と自然の見境なく人が自然に生きた時代があった。それならやはり自然とは人間も含めた総合的な概念として捉えたい。そこで営まれてきた庭とはまさに Human Power、Human Scale、そして Human Life に基づいて理想を形にしてきたのであった。「良い環境を人間と結びつける」と進士氏が論じたように「人と自然」、そして「人が自然」という関係こそ歴史から学ばなければいけない。まして環境、省エネルギー、情報化が叫ばれる昨今では、「自然本位の人間性」にこそ現代社会が庭から学ぶべき本当の豊かさがあると言えるだろう。

### ■美意識と技術

そこで、これからいったい何を具現化していくのかというところに、現代の庭園の残念なところがある。進士氏が「日本庭園は古い形が表面的にチョコチョコと変わってだけで、この現代に至っても日本庭園くさいものが横行しすぎる」と指摘したように、従来の庭の研究では伝統的といわれる特定の枠にとらわれてしまっている節があると思えるからである。それは一つに、作庭というプロセスが伝統技術の過大評価に支配されてしまっているからではないだろうか。尼崎氏が触れたように、「美意識によって技術は醸成されていく」べきものであるところが、実際は美意識や感性が軽んじられ、従来の後追いだけの伝統技術もしくは既存の名園の二番煎じに甘んじている。果たしてそのような姿勢でモノづくりを行っていると言えるのか。新しい時代には新しい美意識、

そして新しい感性で新しい価値を創造する。その具現化のために新しい技術が醸成されてゆく。「創造性が伝統となる」と尼崎氏が述べたように、紡がれるべき伝統の本当の姿は、人々の創造的営みであるべきなのである。



### ■人間性の奪還

東京オリンピックのメダルラッシュに沸き、歌謡曲がヒットした昭和40年頃はまさに「人」が注目された「人の時代」であった。そんな中で多くの造園家が登場し、近代化の波で蚊帳の外になってしまった自然と人間の関係を導く最後の砦として活躍。それぞれの作風で鏝迫り合いながらも一つの時代をつくった。それは多くの人間性が花開いた最後の時代だったのではないだろうか。いまや、時代は「金の時代」へと急速にシフトし、人々が人間性さえも見失ってしまったように私は思う。自然と人間との関係はもとより、自分が生きるということを再認識し、「私の世界」を描き出してゆく。これが多様な現代庭園の一つの方向性であろう。近代化によってそぎ落とされてしまった人間性を取り戻し、新しい美意識をもって時代を創ってゆく。それが今この分野で必要とされていることであると思う。

進士氏が講演中で『野生の哲学』について触れた。人間も動物であり、生きられる景観こそ理想だと。人間も自然の一部であり、人間が人間らしいことが自然であるということ。つまりそれは先述した「自然本位の人間性」、言葉を換えれば「ヒト本来の人間力」である。これこそこれからの庭園には必要であり、再考してゆくべきであると感じた。

寄稿：細野達哉(東京農業大学大学院)

# 第1回 現地研究会 横浜の名園・三溪園

研究会・シンポジウム実行委員会は、平成17年11月10日に三溪園（神奈川県横浜市）において現地研究会を開催する。

鶴翔閣茶の間棟で、三溪園保勝会の最古参職員である川幡参事から三溪園についてのレクチャーを受けた後、園内を見学。再び鶴翔閣茶の間棟に戻り、研究会を開催する。近代庭園の意匠、石造物、建造物に関心のある方は、ぜひともご参加頂きたい。

## ■参加申し込み

申込方法：研究会・シンポジウム実行委員会の小野までメールまたは葉書でお申し込み頂きたい。

〒162-0052 東京都新宿区戸山3-1-2-404

小野健吉 宛

E-mail : onokenkichijp@yahoo.co.jp

## ■所在地

〒231-0824 神奈川県横浜市中区本牧三之谷 58-1

Tel 045-621-0634

## ■要項

日時：2007年11月10日（土）13:00～17:00

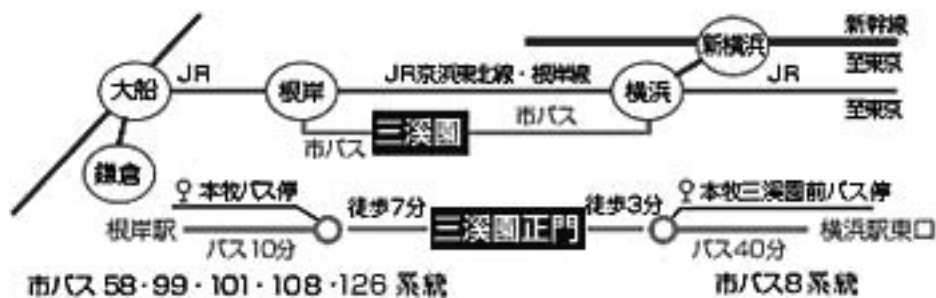
場所：三溪園（集合場所：鶴翔閣茶の間棟 13:00）

定員：20名（鶴翔閣茶の間棟の収容人数による）

※参加費は無料。ただし、三溪園の入場料金500円は別途必要



△▽ <http://www.sankeien.or.jp/> より転用



□ルート1 根岸駅1番乗り場《市バス58・99・101系統》10分 本牧下車・徒歩7分

□ルート2 桜木町駅2番乗り場《市バス8系統 148系統》約25分 本牧三溪園前下車・徒歩約3分

□ルート3 横浜駅東口2番乗り場《市バス8系統 148系統》33分 本牧三溪園前下車・徒歩3分

※ 横浜発 横浜市営バス8系統および148系統のバスは、桜木町を經由して走ります。

※ 横浜発 横浜市営バス148系統のバスは、急行のため同じルートを走る8系統よりも所要時間が5分ほど短くなります。

※ 本牧三溪園前は、みなとぶらりチケットの適用区間外です。ご注意ください。

※ 詳細は横浜市交通局ホームページをご覧ください。

## 現地見学会のお知らせ

「三菱開東閣の建物と庭園」 平成20年3月8日(土)

見学場所 三菱開東閣の建物と庭園

所在地 東京都港区高輪 4-25

日時 平成20年3月8日(土)  
午後1時30分～3時30分

講師 開東閣 小林支配人

参加費 無料

集合時間 午後1時10分

集合場所 ホテル ラフォーレ東京(開東閣前)  
1Fロビー又はコーヒーショップ  
東京都品川区北品川 4-7-36  
TEL 03-5488-3911

交通案内 JR品川駅高輪口より徒歩10分。京浜急行品川駅より徒歩3分。JR品川駅高輪口より無料送迎バスあり。御殿山ガーデン行きバスをご利用のこと(5分で到着、毎時13分、37分、53分の3回運行)。

申し込み方法

下記の宛先まで、氏名・人数をご記入の上、官製葉書にてお申込みのこと。

〒462-0847 名古屋市北区金城 4-7-7 澤田庭園研究所気付日本庭園学会見学会委員会(担当理事:澤田天瑞)



△ <http://okuruma.hp.infoseek.co.jp/photo/etc/0211.htmlor.jp/> より転用

概要

開東閣は、三菱第二代社長岩崎弥之助氏の高輪本邸であり、日本のバッキンガム宮殿と称されている。邸地は西南に張り出した品川八ッ山の台地であって、往時は品川の海の眺めをほしいままにしたという。

この地は伊藤博文公の屋敷が構えられていたのを、明治22年に岩崎家へ売却された。敷地面積は、16,500坪。洋館の設計はJ・コンドル、煉瓦造り2階建てで、一部が3階建て。建築面積は444坪。和室は駿河台本邸より移築。開東閣は、昭和22年の空襲で和館が全焼、洋館は内部を焼失した。昭和29年より復旧が行われ、外壁は当初のままである。正門は池田候の上屋敷の正門で国宝に指定されている。

※通常は非公開であるが、今回は三菱地所様のご厚意により特別の公開となっている。 ■

## 既に行われた現地見学会

### 箱根小湧園貴賓館と迎賓館

去る9月8日に、見学会実行委員会により、下記の見学会が開催された。なお、この情報については、学会ニュース発行時期の都合上、別途葉書にて通知された。

なお、本現地見学会の見学レポートについては、次号の本紙にて菅沼裕氏による見学レポートを掲載する予定である。

見学場所 箱根小湧園貴賓館と迎賓館の庭園と建物

日時 平成19年9月8日(土)  
午後1時～午後3時30分

講師 鈴木誠氏(本学会理事・東京農業大学教授)

交通案内 バス停小湧園前(小田原駅・小田急箱根湯本駅から箱根鉄道バス箱根行き)

概要

明治に大財界で活躍した藤田伝三郎にはじまる財別藤田家は独自に工夫を凝らした庭園、家屋を造営したことで知られる。二代目平太郎が東京椿山荘を受け継いだ同じ年に造営した箱根小湧園の別荘が、現在箱根小湧園貴賓館および迎賓館として現存する。 ■



## 連載 庭園探訪 第4回

## 廣誠院庭園（京都府京都市）

今日、京都の河原町御池といえば、ゆったりと歩道が確保された4車線の道路道路が交差し、オフィスビル・マンション・官公庁が建ち並ぶ繁華街である。そんな賑やかな地域も一筋東に入り森鴉外の『高瀬舟』で著名な高瀬川近辺に至ると、先ほどまでの喧噪を忘れてしまうほど落ち着いた佇まいへと趣を変える。

その高瀬川の起点になったのが一之舟入であり、明治の初めまで一帯には長州藩の屋敷があった。その跡地には京都府の勸業場が設けられ、その広大な敷地が民間へ払い下げられた後には、当時の有力な政財界人達が別荘を構えた。今日となつてはその殆どが失われているが、今回紹介する廣誠院はかつて二条木屋町界隈に集中した別荘群の名残を今に伝える貴重な近代の遺産である。



園池と石橋（奥に見えるのが書院）

廣誠院は、そもそも明治25年(1892)に伊集院兼常が構えた屋敷であり、現存する書院・茶室・広間などはその時に造られたものである。鹿兒島の門閥出身の伊集院兼常は、薩摩藩の宮内省関係の仕事に携わり、明治維新後は官僚や軍人を経て実業家として活躍した。宮家の御殿などの建築を手がけ、国指定名勝對龍山荘庭園の原型を造ったことでも知られる。

伊集院の手を離れた屋敷は、明治29年に下郷家の所有となり、明治35年に実業家の廣瀬家の手に渡った後、昭和27年に臨濟宗の寺院となり現在に至る。



書院の外観と庭園の流れ

廣誠院の庭園は、明治25年から約5年間、当地が伊集院所有であった時期に建物と共に造られたと考えられる。兼常は庭園に対する造詣が極めて高かったといわれており、南禅寺界隈において数多くの別荘庭園を手がけた7代目小川治兵衛は、庭造りにおいて多くのことを彼から学んだと述懐している。

園池を中心に築山が配された庭園は、敷地北側に位置する書院と茶室、広間に南面する。園池の水は東側に隣接する高瀬川から取水され再び元の川に戻っている。このように人工河川から取水し再び水を戻すという仕組みを持った庭は、京都では上賀茂神社の社家町(明神川)や松ヶ崎界隈(泉川)で見られる。

その庭園と建物が融和した様は実に見事であり、特に護岸の一部を兼ねた礎石の上に立つ細い柱で支えられた茶室の浮遊観は、流れとの一体感を際立たせている。また溪谷を彷彿させるその流れには、所々に沢飛びが打たれている。書院と園池との間には真黒石の大きな沓脱ぎ石が介しており、さらに書院の大きな廂を支える柱の礎石が池の中に据えられるなど、随所に軽やかな趣が演出されている。全体的には近代数寄屋風の趣を持ちながら、石質や石使いからみて江戸期の雰囲気を感じさせる。近代庭園の黎明期に造られた貴重な庭園として、平成16年度に京都市指定名勝となった。(今江秀史)

※写真は『京都市の文化財 第22集』より転用

## 特集 図書紹介

### 集めてみました 一見意外な庭の本

「図書紹介」のコーナーでは、最近刊行された庭に関する書籍を中心として紹介しているが、今回は特集記事とし、少し趣向を変えてお送りしたい。庭園を愛でる人々、それに係わる仕事をしている人々にとっては、どうしても直接「庭園」に関係する図書に関心が向かいがちである。しかし、庭を主題に取り上げたもの以外にも庭について書かれた図書は意外に多くある。そこで、ここでは様々な視点で庭園が取り上げられている図書を若干執筆者の問題意識とともに紹介する。

#### 『銭湯の謎』

町田忍著

2001.11、扶桑社

(本体 1,143 円+税)



本書は、これまで2千を超える銭湯を踏破してきた庶民文化探求家・町田忍氏による雑学的銭湯研究書である。庭園に池がつくられるように、風呂はある空間に水を張るといふ点で庭園ときわめて近い関係にある。

特にそれが露天風呂ともなれば、護岸石組、滝石組など、庭園の設計言語そのままに空間が構成されているものが多いからだ。

本書で特に注目されるのは、銭湯建築の様式的特徴を指摘した点だ。「東京型」は大黒湯(東京都足立区)に代表されるように千鳥破風や懸魚など神社仏閣スタイルを基調としたものが多く、「関西型」は美章園温泉(大阪府大阪市)など、洋風建築の導入が戦前においてひとつのスタイルを形成したという。庭園的な観点でみてゆくと、銭湯に坪庭を設けたものは圧倒的に東京に多く、昭和30年代には、浴室の天井高さまで黒ボク石によって築山を組み上げ、さながら富士塚のごとく空間化をはかるものも登場したらしい。いっぽう関西はタイル仕立ての浴槽が多かったようだが、これなどは和風スタイルの東京型と、洋風スタイルの関西型の相違が明快に示されているといえる。

これまで庭園分野は、いかにもという感じの「The 日本庭園」ばかり目を向けてきたのではないだろうか。いっぽうで「庭もどき」のような空間をどう捉えるか、本書はそのようなわたしたちの問いに対して、興味深い示唆を与えてくれるだろう。(粟野隆)

#### 『京の橋物語』 松村博著 1994.9、松籟社

(968 円税込)

山紫水明の地と呼ばれる京都には、桂川・賀茂川・宇治川を代表とする数多くの川が、時に分かれまた合流しながら街中を走っている。かつて平安貴族の別業が造営された嵐山の地を流れる大堰川、庭園材料に欠かせない白川砂を産出した白川、森鷗外の著『高瀬舟』の舞台になった高瀬川など、京都の歴史を辿る上で川は重要な存在といえる。そして、生活と川がある所に欠くことができないのが橋であり、本書では京内の数多くの橋が取り上げられている。

京都の橋というと即座に思い浮かぶのは渡月橋・三条大橋・宇治橋などであるが、鴨川だけをみても上流の賀茂川・高野川と併せると実に細かい間隔で大小の橋が架けられているので、それらの橋を紹介するだけでも話題に事欠かないと思われる。ところが本書では、概略ではあるが一章分も割かれており、平安期から江戸期に至る庭内の橋の変遷とその形式について多くの写真が用いて解説されている。橋の専門家による構造や意匠、仕上がりに対する眼差しが新鮮であり、醍醐寺三宝院離宮のように水池に架けられた橋に限らず、大徳寺大仙院方丈の石庭や、高台寺の観月台、平安神宮神苑における臥龍橋の沢飛び石など、幅広い視野で多様な庭内の橋が紹介されている。(今江秀史)



## 『対称性人類学 カイエ・ソバージュ V (講談社選書メチエ)』

中沢新一著 2004.2、講談社

(1,785 円税込)



宗教学者、中沢新一の全五巻からなる「超越的なもの」をめぐる人類の思索史、カイエ・ソバージュ (Cahier Sauvage) シリーズの最終巻。

「対称性」とはあらゆる存在がお互いの間につながりを見出すこと。かつて世界は人間と動物、個人と全体を区別することのない「対称性」の思考に彩られていた。支配—被支配の隔てもなく、死と生の間にすら決定的な差異は認められていなかった。ところが、国家や一神教に象徴される「非対称性」の力が世のすみずみまで行きわたった結果、現在全世界で深刻な行き詰まりが生じている。人類の本質が「対称性」にあり、仏教こそ「対称性」を極限まで磨きあげた思想とされ、「非対称」の価値観から仏教的な「対称性」の価値観への転換の試みを導くものとして、庭園さらには庭師の働きが論じられている。「庭園は、それを生んでいる文化の本質を映し出す鏡のような存在であり、庭園はその国の文化を精神分析するための格好の材料」と中沢は言う。(町田香)

## 『日本の伝統 (光文社知恵の森文庫)』

岡本太郎著 2005.5、光文社

(本体629円+税)



岡本太郎、1996年没。享年84歳。日本を代表する現代芸術家として、今もその名を轟かせる大芸術家。本書は、故人が「中央公論」や「みずゑ」などに発表した短編を一冊にしたものである。著者は、「伝統とは創造である」ことを主題とし、伝統は、己が新しい価値を現在に創造するという情熱によってのみ継承され、将来に伝わっていくという。そして、縄文土器・光琳・中世の庭を題材に、各時代にそれらが置かれていた素朴な生活事情を読み解き、人間としてたくましく全的に生きる情熱が新しい伝統の証になると強く主張する。

わが国において「庭」という場合、多くの人々は生活の中における我が家を想像しようが、他国では例にみないものであり、それは今日遺る名園の流れをくむものだという。原始社会での庭は、集団全体の広場として宗教的儀式や政治の集會が行われ、生産のための場にもなった。農耕社会では、家畜を放ち収穫物を処理するための作業場であり、さらに物々交換がさかんになると市場にもなった。すなわち庭は、生活の幅を含めた集団社会の共通の広場であった

という。その後、社会の階級差が顕著になると、権力者占有の庭として、政事、遊技、催しが行われた。室町以降になると、庭は活動的な生活の場から、落ち着いた環境にて瞑想を行うような場に変質し公共性を失い始める。その後、形式は複雑化したが、それらは中世以前の庭の亜流であるというほど、庭の歴史において中世は重要な時期であったという。

庭が日本の伝統の大きな一を占めているにも関わらず一般の人々にあまりしまれていないのは、庭を知るには実際に訪れる以外に手はないが、それをみて廻るにはかなりの余暇・勢力・弛緩が必要であるからだと指摘する。筆者は、実際に訪れたことのない人にも分かりやすいように数多く写真を使ってたくさんの庭の紹介をしている。(今江秀史)

## 『飛田百番 遊郭の残照』

橋爪紳也監修 2004.1、創元社

(本体 2,000 円+税)



大阪環状線天王寺駅から旭通りを西南に下り、新開筋商店街東の一筋目を南に歩をすすめると、唐破風に牡丹の透かし彫り懸魚を配した、二階建ての豪華絢爛たる和風建築が角地に姿を現す。近代大阪を代表する花街として名を馳せた飛田新地でも、その豪華さゆえにひととき威容を誇った貸座敷「百番」だ。現在は料亭「鯛よし百番」として存続している。

本書は、そんな遊郭建築に魅せられた都市・建築史家、橋爪紳也氏監修による百番の写真・記録集である。ページをめくると、日光東照宮や住吉大社を模して、朱塗りの柱や金箔を貼った襖絵、透かしの木彫りや飾り金具であてやかに装飾した客間の写真に心が奪われる。なかでも魅了されるのは中庭に設けられた夫婦岩の石組だ。上空を見上げる陽石は高さ 2.8m、重さ 1.8t で、その脇に控える陰石は幅・高さともに 3m を超え、重さは 5t にも達する。この建物の機能をもっとも端的に現した中庭の姿を、本書は写真とイラスト、解説によって余すところなく表現する。

本書を通じてわたしたちは、寺院の庭園のような、ある意味禁欲的な空間とは対極につくられた「快楽的な庭園」とはいったい何かと、思わず考えてみたくなることだろう。遊郭特有の数奇屋意匠の本質に迫った好著である。

(栗野隆)

## 『考古学と中世史研究 1 中世の系譜 東と西、北と南の世界』

小野正敏、五味文彦、萩原三雄編 2004.7、高志書院

(本体 2,500 円+税)



中世を中心として考古学や文献学、庭園史など、多様な分野からの報告がまとめられた本書は、帝京大学山梨文化財研究所が 2003 年 6 月に開催した同名のシンポジウムの報告書である。同書では本中眞氏が「中世世界の庭園」と題し、まず古代の遺跡庭園の事例を紹介した上で、書院造りの〈広庭〉と〈庭園〉、枯山水の意匠、都から地方への庭園文化の伝播といった 3 つの項目を通じて中世の庭園を解説している。

本中氏は、庭園は〈生活空間〉と〈芸術空間〉という二つの性質から成立すると位置づけた上で論を展開している。この二つの性質は互いに密接な関係を持ち、いわば両義的でさえあるが、双方は時として他方の側面を否定する局面もあるという。この両側面は、古代から中世、近世へ通じて、ある時期には一方が他方を支えまたある時期には一方が他方を否定するといったように、複雑な相互依存と拮抗の関係をもちながら庭園を変化させる原動力になってきた。そして、その拮抗関係が頂点に達したまさにその時が中世であると位置づけている。

また、古代の庭園を、儀式に用いられた白州の〈広庭〉と、造り庭としての〈庭園〉に峻別して分析するなど、従来の造り庭偏重の庭園史観とは異なる視点が随所にみられる。また、各時代の自然観が信仰や宗教の影響により変化し、それが庭園の意匠や構造に影響を与えたことを指摘している。

(今江秀史)

## 『日本美術の歴史』

辻惟雄著 2005.12、東京大学出版会

(本体 2,800 円 + 税)



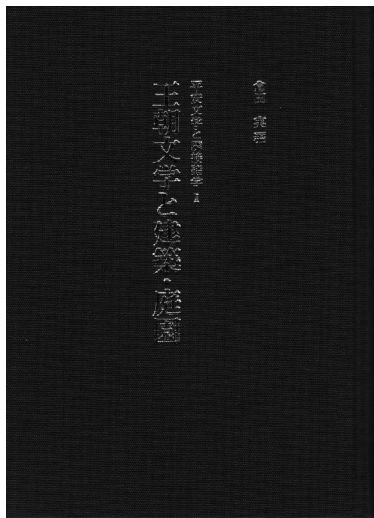
美術史学者・辻惟雄が美術史研究の集大成として、満を持して送り出した日本美術史の総論。従来の優等生的な美術史を横目に、辻が時代や分野を超えて存在する日本美術の特質とは何かを考えた結果、長年の研究から紡ぎ出されたのが「かざり」「あそび」「アミニズム」という三つのキーワード。これらのキーワードによって、縄文時代から現代にわたる独自の日本美術の歴史が生み出されており、まさに辻ワールドそのものである。

この独自の美意識をもって構築された美術史で庭園はいかに料理されているのか。「かざり」「あそび」「アミニズム」というキーワードの世界に招かれた庭園とは、そしてその意味は。辻美術史の中に組み込まれる庭園は、庭園史、造園史にはない不思議で新しい一面が開拓されている。(町田香)

## 『平安文学と隣接諸学 1 王朝文学と建築・庭園』

倉田実編 2007.5、竹林舎

(本体 14,000 円 + 税)



王朝文学の主たる舞台となったのは、寝殿造と称される貴族邸宅であり、そこには庭や建造物が欠かせなかった。寝殿造りは、儀式儀礼の場を兼ねた邸宅であったこと、文献に儀式用の指図が掲載され絵巻物に邸宅の様々な箇所が描かれていることから、平安期から遅くは室町期までの国文学に携わる上で庭と建造物の具体的なあり様を知ることは極めて重要である。

本書は、日向一雄氏監修の「平安文学と隣接諸学」シリーズの一冊として、庭園学・建築学・考古学といった国文学の隣接初学と国文学との学際的共同作業を通ずる寝殿造の実態把握を目指している。その構成は、寝殿造の庭園と建築を巡って「I 寝殿造の諸問題」・「II 王朝文学に見る邸宅」・「III 実在の建物と王朝文学」・「IV 庭園の思想」・「文学空間としての平安京内裏」の全5章から成立しており、庭園学では仲隆裕「庭園史からみた王朝文学-寝殿造庭園における植栽-」と今江秀史「遺構からみた平安期の庭」が掲載されている。

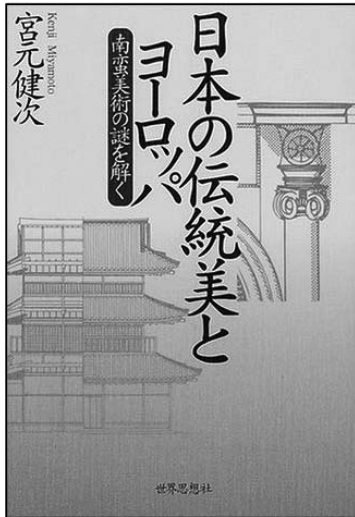
平安期の寝殿造は現存しないため、庭の具体像を明らかにする方途は、庭について触れられた文献や絵巻物、庭の遺構に関する考古学からの見地に依拠するしかないように思われる。しかし本書を通せば、必ずしも庭そのものに触れられていなくても史料や遺跡からその実態に迫れることを実感できる。例えば臈谷壽「邸宅の売買と相続」からは、寝殿造が契約書を交わして売買される不動産であったことが知られる。確かに寝殿造が土地と建物から成立している以上、寝殿造を不動産として捉えるのは当然であり、不動産価値の地域差と庭造り事情が密接に関係していたことは慶滋保胤の『池亭記』の記述からも明らかである。また、その関係は遺跡の検出状況から立証できる可能性もあろう。今後の平安期における庭の研究の広がりを示唆する一冊である。(今江秀史)



## 『日本の伝統美とヨーロッパ - 南蛮美術の謎を解く』

宮元健次 2001.3、世界思想社

(本体 2,000 円 + 税)



日本にキリスト教が伝来したのは 1549 年のことである。それ以後キリスト教は、信長や秀吉の保護を受け、1612 年のキリスト禁令発布までの約 60 年間、日本人はあらゆる西欧文化に接触した。

今まで見たこともない西欧文化に触れた日本人は、それらを拒むことなく、むしろ美術や建築、生活様式に至るまで積極的に取り入れた。しかし、キリスト教伝来による日本文化への影響については、あまり語られることがない。

本書は、そのキリスト教伝来による日本建築及び庭園への西欧文化の影響に関して、桂離宮や修学院離宮、東照宮、また妙喜庵待庵などの茶室について考察している。

特に第三章では、寛永年間に活躍した宮廷文化人らによる建築や庭園における西欧文化の影響を指摘している。後陽成天皇の命により宣教師から宮廷付工人に西欧技術が伝えられという宣教師の報告があり、著者はその宮廷付工人というのが小堀遠州であると断定したうえで、遠州が関わった庭園は黄金分割が用いられていることや、人工的なデザインとなっていることを述べている。

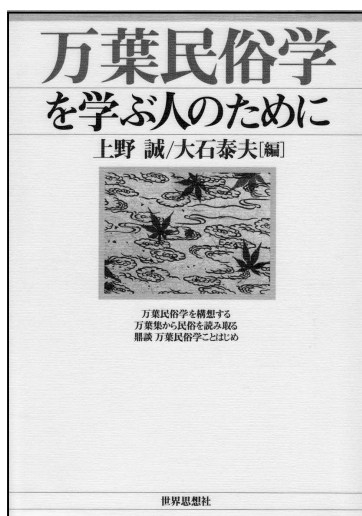
また桂離宮に存在する七本の織部灯笼は、遠州の考案であり、キリシタンであった八条宮家臣本郷織部の鎮魂のためであるとしており、大変興味深い。

しかし本書には実際の史料や写真、図版が少なく、推論の域を越えないように感じる。だが著者の斬新な論は、キリスト教伝来による日本文化と西欧文化の融合について深く考える契機となるものである。(寄稿：春成美奈子)

## 『万葉民俗学を学ぶ人のために』

上野誠、大石泰男編 2003.10、世界思想社

(本体 2,200 円 + 税)



<万葉民俗学>とは聞き慣れない学問分野である。おそらく名称からして、万葉集 + 民俗学の研究をしているであろうことは予想されるが、素人考えではそんな古代の民俗学研究などが可能なのかと疑念を感じ得ない。また、そもそも民俗学は聞き書きによって身近な生活の歴史を記述する学問であり、それからいけば上古時代の生活を聞き書きすることは事実上不可能なはずなので、万葉民俗学という名称自体が論理矛盾を抱えていることになる。

しかし、生ける者からの聞き書きでしか生活の歴史を記述できないという固定観念が民俗学に限界を与えてきたともいえるようだ。いわばその反省から、万葉歌の表現から生活の歴史を研究する<万葉民俗学>と生活の歴史から歌の表現を研究する<万葉歌の民俗学的研究>の往復作業を通じて、生活の古代史研究の方法が構想され、さらにその実践的研究が紹介されている。

東城敏毅氏による「住空間の民俗-「風景」の発見と「わがヤドの成立-」」では、万葉の時代のニハ・ヤド・イへの概念が考察されている。現在、庭園学では古代の庭園を考察する上で遺跡庭園の検出事例を参考にすることが通例となっているが、古代における庭の生活は遺跡だけで知り得ることはできないため、万葉民俗学の研究方法は庭の歴史探究に関しても実に興味深い試みといえる。(今江秀史)

## 『京の坪庭を楽しむ』

コロナブックス編集部編 2006.3、平凡社

(本体 1,600 円 + 税)



いわゆるタイトルどおりの簡単な解説やエッセイなどを交えた写真集である。京都にあるさまざまな露地、中庭を交えて坪庭を紹介しており、坪庭の入門書として手に取りやすい本である。京町家の坪庭を主体に、大仙院や瓢箪庵といった普段は拝観出来ないような庭から、現代の商業空間の坪庭、道の脇にある前栽まで多種多様な庭が紹介されている。

社寺の庭の紹介ではいわゆるよくある写真集そのものであるが、京町家と現代の坪庭に関しては、そのどれもが生活に基づいた使われ方に注視されているところが興味深い。坪庭がもつ採光・通風以外の機能として、建物と密接な関係から生まれる庭としての魅力や、坪庭だからこそもたらされる豊かな生活のワンシーンが写真から伝わり、人と密接な関係にある庭の美しさを改めて実感することができる。特に俵屋旅館については、打ち水という当たり前な行為によって来客が入る寸前の、部屋と庭に静かな緊張感のある空気を生み出しているのが印象的である。

昨今の町家ブーム同様、坪庭ブームにより、このような写真集は巷に溢れているが、専門書を読んだときの息抜きや、知らず知らずのうちに固まってしまった庭の見方を見つめ直してくれる良書といえる。(寄稿：小椋新平)

## なぜ今、図書紹介特集なのか

## 昨今の庭園ブームと将来への人材育成

今回の企画には、大きく二つの意図があった。一つは近年庭園が他の学術分野から関心を持たれている状況を浮かび上がらせることであり、もう一つは庭園学における人材育成の機会とすることであった。

明確なことは不明だが、近頃どうも庭園ブームが来ているようである。その兆候は、テレビや雑誌で庭園の特集が組まれ、数多くの関連図書が上梓されていることにも現れている。

そしてこのブームの深層には、各方面における庭園に対する見方の変化が影響しているように感じられる。それは昨今、庭園学と他の学術分野との双方による積極的な歩み寄りからも知ることができる。庭園学と考古学の連携はもはや恒常化しているが、その関係性は文学と併せてますます密接になっている。庭園学からの歩み寄りは、『奈良文化財研究所学報第74冊古代庭園研究Ⅰ-古墳時代以前～奈良時代-』（奈良文化財研究所、2006）をみれば一目瞭然であり、文学と考古学からの歩み寄りは、今回紹介した『王朝文学と建築・庭園』

や次号の本コーナーにて紹介する予定の西山良平・藤田勝也編著『平安京の住まい』（京都大学学術出版会、2007）からもうかがい知ることができる。

このような学際的取り組みは、何も庭園学に限ったことではなく、今日では様々な学問分野において活発に行われている。しかし、他の学術分野にとってことさら分かりにくいとされてきた庭園の研究に関心が持たれていることは、遺跡庭園の検出例の増加により、元来断片的であった庭園の変遷過程が徐々に補填されてきたことと無関係ではあるまい。したがって、昨今の庭園ブームを一過性のものではないようにするためには、更に考古学を代表とする他分野との交流を積極的に深めていく必要があろう。そしてその為には、現時点で庭園について記された図書がどの程度あるかを把握しておく必要があると考えた次第なのである。

そして、この機会を通じて結果的に将来の庭園文化を支える人材の育成になればと考えたものであり、本コーナーでは今後も若い学生らに執筆の機会を提供していく予定である。最後に、本特集に際して、寄稿を頂いた京都工芸繊維大学大学院修士課程の春成美奈子氏と京都造形芸術大学環境デザイン学科の学部生小椋新平氏に厚く御礼を申し上げる。

# 学 び の 庭

## 第5回 森林美学

### 話題提供者

高梨武彦 (たかなし たけひこ)

### プロフィール

1955 静岡県裾野町生まれ

### 経 歴

1978 日本大学農獣医学部材料学科 卒業

1980 京都大学農学部造園学研究室研究生 修了

1987 林野庁 退職

1994 京都芸術短期大学非常勤講師

1996 京都造形芸術大学専任講師

現在 京都造形芸術大学准教授

### 専 門 森林美学

### 著 書

『森の生態と花修景』(共著、角川書店、1998)

### 論 文

「京都・東山及び嵐山で行った森林に関する意識調査」  
(デザイン学研究 51(3)、2004)

「林内景観の空間表現と森林風致施業指針」  
(デザイン学研究 54(2)、2005) 他多数

編集部(以下、編) 今回は、森林美学を専門とされ庭の樹木・樹林調査等にも数多く実績をお持ちの高梨武彦氏にお話を伺います。さて先生は、樹木を扱うという点では共通しているものの、異なったお立場から庭に携わっておいでですが、庭に関わっていて普段感じておられることを教えてください。

高梨氏(以下、高) 庭に携わっていて難しいと思うことは、庭園整備を行うときは基本的に石組みを骨格として重要視していこうと考えますが、植栽のほうから整備を考え始めることは少ないのではないのでしょうか。百年前に造られた庭でも二百年前に造られた庭でも、その当時の植栽の有り様を知る人は、現在となつては誰もいません。だからこそ私は、各々の時代の美しさに即した植物の管理をすることも求められると思います。また、そのようなことに取り組まなければ、本来の庭の植栽が整備されているとはいえないでしょう。

編 なるほど。

高 石組みであれば、それぞれの石に番号をつけることなど

によって復元のやりようがありますが、植物の場合、一旦移植したものをそのまま戻すということは不可能です。それからいえば、素材が生き物の場合、その時代ごとの美しさを定義していくという考えがあってもよいと思います。したがって、たとえとても格好が良い植栽があっても、それが今、石組を壊しているのであれば伐採して、その庭園に相応しい美しさの植物の植栽を検討することが望まれます。

編 ところで、森林美学とは一般には耳馴染みがないかもしれないので、どのような学術分野なのか教えてください。

高 定義は書籍などに譲るとしまして、考え方を述べましょう。まず、森林はいつも同じ顔でいません。一般の人には今の森林と5年前の森林は同じように見えていますが、実際は状態が異なっています。ということは、森林の美しさも今と5年前とはやはり違います。ですから、その違いを敏感に読み取り森林の取り扱いを提示できるのが森林美学の専門家といえます。そのような美的な判断と技術の両方を適切に判断できる人はあまりいません。

編 技術ですか？

高 そう、ここで技術とっているのは、生態学的に森林がどのような構造であるとか、この構造なら将来的にどのような成長していくであろうか、または植生遷移がどのように変わっていくかということです。本来、美しさと技術の両方の判断が的確にできてこそ初めて、森林の有効活用やレクリエーション的な取り扱いが満足にできるといえるでしょう。このようなことは、田村剛先生など森林風景計画の先覚者が既に提唱されていることですが、概念的であり、また庭師の親方のようにかなり経験を積んだ人にしか認識できないものなので、森林の美しさというのがどのような森林の構造であるのかが上手く伝わってこなかったという側面があります。今思うと、毎木調査をして情報を蓄積していればその実像が明らかになったはずですが、残念ながら目にしたことはありません。

編 ということならば、どのように森林の美しさを提示するのですか？

高 ないものをねだっても仕方ありませんので、美しい森林というものの見方を養っていかなければ判断できないのです。それは自然美でも芸術美でもそうでしょう。

編 確かに。

高 だから自分が美しいと思う様々な森林を見て歩き、構造を調査します。たとえばこの森林ではこのような美しさを感じられたとすれば、その構造調査を一つ一つ蓄積していくということが求められているのだと思います。一方で、それは



高梨個人が感じた美しさであり、主観的といわれてもそれはそれで仕方ありませんが、着実に情報を集めれば傾向が現れてきます。その傾向を数値化して客観化することによって若干なり高梨が個人として美しいという森林を提示できると考えています。

編 主観と客観の間で揺らいでいるような気分になります。

高 森林を数値化したりコンピューターで解析したりするのは、あくまでも人に説明するために必要とされる作業です。それが最終の目的ではなく、本当の目的は本人が森林の実像を明確に実感できることであり、そのことを教えるのが教育であると考えます。今は、そのような主観を扱ってくれる場は少ないですね。

編 確かにそのような風潮もあるような気がします。

高 ただ、そんなことを言っても先に進めないわけですから、何を言われても今はひたすらたくさん調査事例を集め、このような傾向があるのだからその森林の美しさはこのような構造とすれば再現できるということを提示して、みなさんにそれを利用して頂こうと思って研究をしています。

編 そのような森林美学の目から庭を見るとどのように写るのでしょうか。

高 私は庭の樹木を見る時も、剪定することによって得られる美しさと、その木がどこに配置されていれば一番美しく成長できるのかといった違いを観察しています。植栽をする時は、所有者や庭師が構図をみてとり行いますが、一旦植栽された樹木または実生の樹木であれば自然の成り行きで成長していくわけですから、あとはその美しさを見極める目をもった人が必要であり、すなわち庭師の見立てが問われることになるのです。現在の職人は遠慮しているのかもしれないけども、自発的に見立てをしないで、すぐに誰かに判断を確認する節がある。これは言い過ぎかもしれませんが見立て力が落ちているということかもしれません、やはり自信をもって自分の美しさを表現できないといけないと思います。

編 植栽の成長に対する対応はどのようにしていけばよいのでしょうか。

高 どのような古い庭園でも現在生えている植栽は、大概は百数十年から二百年くらい生きているものが最高年齢でしょう。ですから、庭が造られた当初と現在とでは植栽の状況には大きな差異があつて当然で、かつてそこにあつた樹木はどうであつたのかという議論は成立しえても再現できません。現在の樹木は、あくまでも現在の施主が自身の美しさにのつとつて見立てた世界なのです。その施主が見立てた世界を庭師がくみ取って実現した庭が、良く管理された庭となります。

今は双方が切磋琢磨する機会がないのかどうかははっきりしたことは不明ですが、やはり施主の意見を尊重するという方向性があつてもよいと思います。

編 ところで、庭の整備を行う上で植栽計画をする時、そもそもこの時代における植栽が造り出す世界観はどのようなものだったのか分からなくて困ることがよくありますが、昔の植生の構造を復元する手がかりはありますか。

高 古代にどのような植栽が使われていたかは文献や絵画、発掘調査による種子などの分析からある程度は知られます。しかし残念ながらそれは庭の空間構成を伝えるものではないため、植栽がどのような場所にどのような枝ぶり、木の表裏がどのような状態で植わっていたかという検討が別途必要になります。それを考える際には、今の美しさを基準として昔の状態を再現するというのも一つの判断ですが、そのような議論はなされていない。やはり植物の成育立地特性まで踏み込んだ植栽計画議論が必要です。樹木は山や沢など場所を限定されて生えているという本来の性質を理解して、あの時代にこの樹種がこのような立地に植えられていたのであれば、このような光や通風の具合で存在したのではないかとすることは検討できるでしょう。

編 その場合、飛田範夫氏の著書『日本庭園の植栽史』などが参考になってくるのでしょうか。

高 庭の植栽を通史的に検討するという考え方の先鞭をつけたという点で、たいへん評価される研究だと思います。かつて和歌ではキキョウなど人里植物が多く読まれています。それはキキョウなどが身の回りに普通に見られたということを示唆してくれます。また、かつて山里は今のような藪ではなく疎林だつたと考えられるので、比較的快適な場所であつたと思うのです。そのため、規模の大きさはともかく風景の移植、例えば吉野の趣を嵐山の風景に取り入れるということが行われたように、庭にも自然の趣を取り入れたことは想像に難くありません。仮にそうであれば、かつての山里における植物構成がわかると、引いては庭の風景の復元に役立つということになります。

編 それぞれの時代の自然植生のあり方に着想を得て、植栽計画を練るということでしょうか。

編 またこんなこともいえます。京都の東山から月が上ってくる際、マツの幹が月光を帯びながらゆっくり現れてくると、いきなり照葉樹林のかたまりから月がよぎって出てくるのでは情緒が全く違います。やはりマツの疎林の赤い幹が林立しているところに月がすつと現れてすうつと天に昇る。このような感性が庭園の景に取り入れられ、当然植栽計

画にも反映されたはずなのです。

編 昔と今で庭が置かれている状態が大きく変化していることが、植栽計画を困難にしているともいえますか。

高 近年、自然環境に対する目が生物の多様性・生態学に向けられることになったことで、環境に対する見方が複雑になり、庭を庭として見るという普段な行為が困難になってきました。庭は今でこそ孤立した状態にありますが、かつては森林や農地などと隣接していたので、動植物の移動が比較的容易であったと想像できます。それが今日の都市内の庭園では、新しい価値観として、都市における緑のオアシスという見地ができつつある。諸説あるでしょうが、それが庭らしさを実現する植栽管理を困難にしている一因ともいえるかもしれません。

編 最後に先生にとっての庭園に対する率直な印象とはどのようなものですか。

高 私にとって庭はやすらぎの空間といえるものです。それは私自身が元々農家の出身なので、家を囲んで畑があって庭があってというのが日常の世界でした。だからそのような空間が一番安らぎます。また一方で庭園という造り込まれた一つの美的空間といった場があればよいと思います。いずれにしてもそれは生活の場ということなのですから。

編 長時間にわたり、本当にありがとうございました。

(平成 19 年 9 月 19 日)

インタビュアー：今江 秀史

## 広報スタッフの募集

広報委員会（委員長 仲隆裕）では、引き続き本紙「学会ニュース」及びホームページの作成のお手伝いをして下さる方を募集しております。

「学会ニュース」作成では、執筆者、編集者、デザイナー、そして地域特派員を必要としております。また、ホームページ作成では、html と CSS の知識のある方、データベース作成のための調査及びデータ入力をして下さる方を必要としております。

「学会ニュース」及び興味があるホームページ作成に興味があるという方は、下記メールアドレスまでご連絡頂きますよう、よろしく申し上げます。

e-mail:hideimae@mail.goo.ne.jp

今江秀史（広報担当理事）

## ■編集後記

猛暑もようやくやわらいでまいりました。今号は平成 19 年度関西大会の予告と、特集記事として図書紹介を増ページしてお届けいたします▼本年度の第 1 回関西研究会は台風来襲直後に京都で開催されました。「オニマスの庭・アノニマスな庭」はその概要報告です。これまでの発掘調査事例をじっくりと読み解き、縄文時代から現代にいたるまでの「にわ」の特性を考究しようというとりくみで、学会の若手メンバーによる研究成果は次回の公開研究会で発表されひろく討議してゆく、という方法で行われます。第 2 回研究会は来年 2 月に予定されていますので是非ご参加をお願いいたします▼広報委員会では広報スタッフを募集していますが、うれしいことに多くの方が研究会やインタビューの録画・録音やテープ起こしの助力を申し出ていただきました。本号では単なる「裏方」ではなく、自らの庭園観や興味関心を積極的に紹介するかたちで協力していただきたいと考え、「図書紹介」を特集記事として編集してみました。専門的な「書評」は学会誌で行われています。あわせてお読みください▼今年度の関西大会の詳細は次号にてお知らせいたしますが、40 年ぶりで本格的に実施されている醍醐寺三宝院庭園の護岸石組修理もいよいよ最終年度を迎えていることから、京都市山科地区での開催が予定されています▼関西大会での研究発表も登録募集が始まります。引き続き多くの発表登録をお待ちしています▼次号は 11 月中旬の発行予定です。

## ■学会ニュースへの投稿は下記宛にお願いします。

〒 606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116 京都造形芸術大学日本庭園研究センター 気付

日本庭園学会 広報委員会「学会ニュース」係

FAX(075)791-9342

編集長／仲 隆裕 編集・構成／今江 秀史

協力／栗野 隆、町田 香

## 日本庭園学会広報委員会

委員長／仲 隆裕 委員／今江 秀史・吹田直子

〒 606-8271 京都市左京区北白川瓜生山 2-116

京都造形芸術大学日本庭園研究センター 気付

日本庭園学会関西支部事務局 FAX(075)791-9342